

今年度の取組に感謝

学校支援課長 高橋 恒彦



大災害の記憶が未だ生々しく残る平成23年度も、しめくくりに近い状態が続いていました。様々な緊急案件のあった今年度でしたが、そのたびに各学校・園では適切に丁寧な対応をしていただきました。ありがとうございました。

とりわけ、被災児童生徒の受け入れに際しては、校長先生のリーダーシップの下、受け入れ校の全教職員が親身になって心を砕いてくださる姿がありました。「短い間だったけれど、離れがなくなるほどたくさんの友達と心温まる思い出ができてよかった。また、いつの日か、家族全員でこの新潟を旅行で訪れたい。」という別れ際の言葉は、新潟市教職員の温かい心を映し出したものとして、私の記憶に深く刻まれています。

さて、震災の影響で一斉実施が見送りとなった全国学力・学習状況調査を用いた新潟市の学力実態調査では、子どもたちの学力が上向きに転じている様子がうかがえました。前号でも紹介しましたが、現場の先生方の地道な努力が、その背景にあるものと考えています。

特に、今年度6月に配付した「授業づくりリーフレット」に基づく授業研究や全職員一丸となった日々の授業改善、ステップアップWeb配信問題を活用した復習や個別指導など、各校の実態に即した実践が展開されている様子を心強く感じています。

中学校では、来年度から新学習指導要領が全面実施となります。これまで様々な情報をもとに準備を進めていただいたところですが、改訂の趣旨の更なる実現につなげてくださるようお願いいたします。

教育に携わる私たちの仕事は、取組の成果がすぐには見えてこない側面をもってしています。しかし、それでも子どもの成長を願い、日々、丁寧に心を耕し、種をまく作業は、子どもの中にしっかり根付いているものと信じています。本号最終ページにあるような新成人の姿は、そのことを物語っているように思います。今年度の皆さんの取組に感謝しつつ、来年度も未来をつくる仕事に共に邁進することを確認し合いたいと思います。

授業づくりワンポイントシリーズ 理科

平成23年12月9日(金) 南浜小学校 4年 授業者 高見 潤 教諭

教師は子どもたちに、「ペットボトルにはめたゴム栓が、暖めると勢いよく飛び出す事象」を提示し、理由を考えさせた。子どもたちは「きっと、中の空気が〇〇になっているはずだから、この実験をすると、〇〇になるはずだ」と仮説を立てて実験に取り組んだ。「くやしいけど〇〇さんの言う結果だった」という子どももいた。強い問題意識をもった子どもの姿である。

本時における授業づくりのポイントは、ズバリ「観察、実験の前後」の指導にある。



ものの体積と温度

観察・実験の前に



「ゴムの栓が飛ぶのはなぜか」…前時で、一人一人が立てた仮説や実験方法に基づいて、似ている考え同士で班を編制したうえで、本時の授業を迎えた。

実験に入る前の段階で、教師は、「暖められた空気が軽くなって上にあがって栓を押しから」、「空気全体が膨らんで押しから」と、どの結果から何が言えるのかを再確認していた。互いの仮説を交流することで、実験の目的が明確になり、自分の目で確かめてみたいという意欲の高まりにつながっていた。

観察・実験の後で



大型テレビに子どものノートを映しながら、結果と考察を表現させている。友達は、自分に無い考え方や表現も学んでいる。



発表後、再度、実験計画に戻り、「なるほど、この結果を、この時に予想したんだね」と価値づけている。

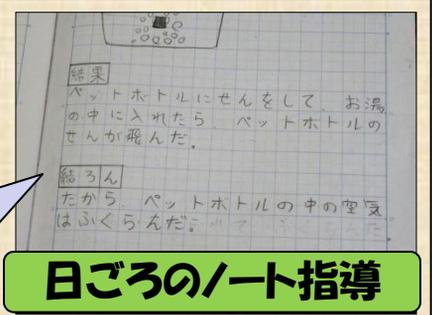


「空気全体が膨らむ」という結論の後、側面に穴を開けたペットボトルを提示すると、「お湯の中に入れて空気泡がポコポコ出る」と予想した。実際にそのとおりになって大きな歓声が上がった。



日頃から、ノートづくりを丁寧に指導している。どのページにも自分の考えが、図や言葉を使って表現されている。教師は子どもの「論理」と「表現」を大切に扱っている。

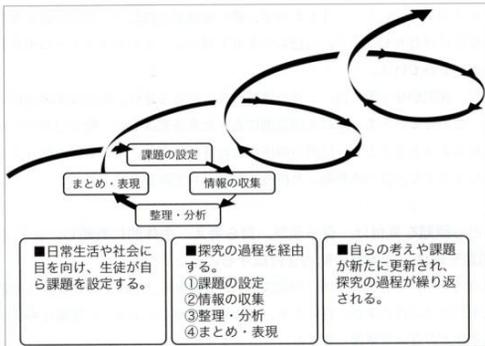
観察、実験の「結果」と「結果から考えられること(考察)」(このノートでは結論となっている)をきちんと分けて記述するように指導している。ノート指導のポイントである。



日ごろのノート指導

授業づくりワンポイントシリーズ「総合」

平成23年12月7日(水) 内野小学校 5年1組 授業者 藤田奈緒子 教諭



今次の改訂で強調される「探究的な学習」は、「課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現」の段階を踏むスパイラルで表わされています。(左図)

「情報の収集」をした後、一足飛びに「まとめ・表現」の活動に移るのではなく、情報の「整理・分析」場面を充実させることが、「総合」を探究的なものとするポイントです。

また、課題が更新されてスパイラルを描くように発展していく単元構成の工夫も望まれています。

藤田教諭の丁寧な取組は、これらのことについて、貴重なヒントを示してくれています。

<単元名> 「MADE in 新潟 2011」

<単元の流れ> ①自分たちが住む地域の食について調べる活動から生産者の思いや苦勞に目を向け、地域の良さを知る。 → ②情報を整理し、新潟大学を訪れる外国人や県外の人に調べたことを分かりやすく紹介する。

<ポイント1> 情報の可視化と整理・分析

集めてきた情報を可視化して伝える効果的な方法を考え、情報を整理したり、関連付けたりします。



「グラフ化するよさ」、「比較するよさ」を検討・確認する



「可視化」を促す、可視化された黒板

<ポイント2> 探究のスパイラルを回し、高められた次の課題へつなぐ

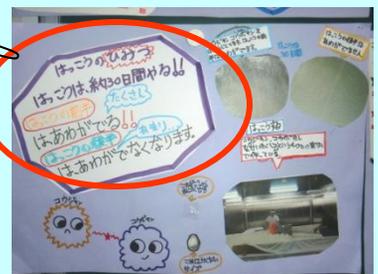
指摘を参考に検討を加え、情報の再整理を行います。他者に「伝える」という目的意識や必然性があるため、より高められた次なる課題が、子ども自身によって設定されます。



付箋で友だちからアドバイスをもらう



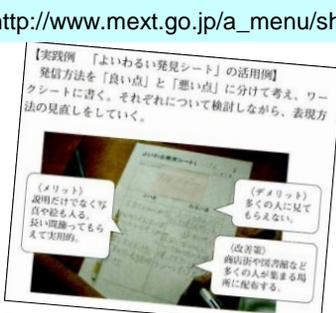
修正のポイントを検討する



簡潔な表現になった完成品

『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開』

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sougou/1300534.htm



探究的な学びを実現する具体的な実践例が、たくさん紹介されています。

ぜひ、参考に！

<文責 田村 篤>

卒業を控えた今、すべきこと

卒業はひとつの生活が終わることだけでなく、新しい生活の始まりでもあります。今までの学校生活に区切りを付けるだけでなく、新しい世界につながるよう指導することが大切です。

◇ 小学校では

新しい生活への希望

中学校に入学したら、勉強、部活、友だちづきあいなど、楽しそうなことがたくさん

しかし、まだ経験したことのない中学校生活には不安も…。怖い先輩はいるのかな？ いじめはあるのかな…？

- 不安を解消するために、中学校の先生や先輩の卒業式の談話を機会あるごとに話したり、たよりに載せたりする。
- 自分たちの後輩に何を残すのか？ 自分たちの歩んできた証を確認し、自己肯定感を高める工夫をする。

◇ 中学校では

中学卒業 ≠ 高校生になること

= 自律した一人前の大人になること

義務教育が終了することを意識させる。

中学校時代に精一杯がんばったかどうか、卒業後の自己肯定感につながる。

- 卒業生に対して、最後まで、全職員でしっかり関わり、立派に卒業させる。
- 卒業期は受験等で精神的に不安定になることが多いが、気持ちを落ち着かせ、普段どおりの生活を送らせることを心がける。
- 生徒によっては、中学校の教師が自分にとって『最後の先生』になることもある。一人一人の心に残る教師であるように心がける。

ちよつとしいい話

今年の「新潟市 成人の日の集い」での出来事。

金髪、金の紋付袴でばっちり決めた新成人のグループが禁止されている缶ビールを持ち込んでいました。担当者が注意すると…、

「俺たちはだめな奴らで高校にも行ってない。」と、聞く耳をもたない様子。

しかし、担当者が中学校の元教師であることを打ち明けると、

「でも、俺たちは中学校の先生の言うことはちゃんと聞く。」

「中学校の先生は何でも相談にのってくれた、相手してくれた。」

「自分の言うことを理解しようとしてくれた。」

と中学校時代を肯定的に話し始め、結局、素直にビールを飲むことをやめてくれたそうです。

彼らが中学校時代を過ごした東区のH中、T中の生徒指導が目につかびます。当時の先生方の努力は、彼らの心の中にしっかり残っていたのです。教師冥利に尽きる話です。